
MHP 3rd fightingハンター

へちや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MHP3rd fightinger Hunter

【Nコード】

N7651Z

【作者名】

へちや

【あらすじ】

温泉で一躍有名なユクモ村に一人の男ハンターがきました。彼はただ温泉ツアーで温泉入りに来たら、しよんな事から狩りにレッツラGO。彼の運命やいかに。

第1話・ようこそ！温泉天国ユクモ村！

「熱い!!」

彼はそう叫びながら温泉から勢い良く立ち上がった。バシャッと飛び散る水しぶきが、近くでドリンクを売るアイルーにかかるほど勢い良く。

「だ、旦那。大丈夫ですかい？」

ドリンク売りのアイルーが驚いたように男に問いかける。

「メチャクチャ熱いじゃねーか！、俺は熱いのが苦手つつつたる！、俺はこの温泉が目的でこの「ユクモ村」に来たのに、もっとぬるくならないのか？」

と、男はドリンク売りに大声でクレームをつけた。

「しかし、他のお客様に迷惑ですニヤ。申し訳ないけど温度は変えられないニヤ。てか、熱くても我慢するニヤ。」

「なんだとお。こっちははるばる遠くからこの温泉入りになあ、来たんだぞ。」

俺はお客様だぞお！」

ドリンク売りと男の大人げない会話を聞いていた、他の客数人が迷惑そうな顔をして客同士ヒソヒソ何か言っている。

「他のお客様に迷惑ですニヤ。悪いけど出ていってもらえますかニヤ？」

ドリンク売りと男の言い合いに割って入るように番台の別のアイルーが男に言う。すると男は。

「分かったよ。熱くても我慢すればいいんだろ。」 と言うと、また文句を言いながら温泉に浸かった。

アイルー達は、ハア〜と顔をうつむけて疲れたといった様なため息をついた。一方彼は、タオルを小さくたたんで頭に寄せ、ふてくされたような顔をして静かに温泉に浸かっていた。

「熱い、出る」

数分もしないうちに、彼は立ち上がって温泉からでた。ホカホカと白い湯気を立てながら温泉の出口に向かう。

「毎度ありニヤ。」

さっきの番台のアイルーが彼にそう言った。

それを聞いてか聞かずか、彼はそそくさと温泉を出ていった。彼はタオル姿から自分の防具に着替えた。

彼の防具はフロギー一式

おもに水没林などに生息する、「ドスフロギー」という大型のモンスター素材から作られている。とても強い防具という分けではないが、彼のお気に入り防具だ。防具は多数のキズや汚れ、色あせた跡がある。かなり使い古された防具である。見た目はオレンジ色をメインとして、テンガロンハットの様な帽子をかぶり、口もとは布のようなもので隠されていて、背中には大きなマントが垂れ下がっている。

武器は「ドロスポーンソード」という大型の剣を背負っている。小型の水獣の素材をベースに骨などで作り上げた一品である。

着替えが終わわり、暇潰しに何かクエストを受けよとギルドカウンターに向かう。カウンターにはクエストを受けようと数人のハンターで賑わっていた。彼と同じようにソロの者や楽しそうに談笑しながらクエストを選ぶパーティー。

「うーん。どのクエストを受けようかなあ……」

彼は人と人の間をすり抜けてカウンターでクエストを選んでいく。すると彼の目はあるクエストに目が止まった。

クエスト名

「強襲する孤島の水流！」（ロアルドローヘッド狩猟）だった。

「よし。これにしよう。丁度コイツ（ロアル）の素材欲しかったし。」

彼はカウンターの人に話しかけようとした。「すいませ……」

までいいかけたその時、彼は気がついた。

契約金200z 所持金183zという事実。

ギルドの人が「はい。なんででしょうか？」

こちらに気がついて言葉を返してきた。

「あ…、やっぱり何でもありません。ハハあ」

こんなにやるせない気持ちは久しぶりだ。

「なぜこれしか無いんだ。まさかスリかあ!？」

しばらくカウンターから少し離れた場所で考えていた。しばらくして答えが解った。温泉に入る少し前に間違えて回復薬99個買ってアイテムBOXに送ってしまったのだ。仕方なく回復薬を3つ売りなんとか所持金200Z越えをし、さっそくカウンターにクエストを受けに行く。

が… 時既に遅し。

「すみません。そのクエストは先ほど他のハンターさんが受けてしまいました。申し訳ありません。」

と、ギルドの人が言った。男は諦められずこう言った。

「そのハンターは誰だ?どのハンターだ? もう出発したのか?」するとギルドの人は

「あちらのお方ですけど」と一人のハンターを指さした。そのハンターは背が低く、160?位の背丈、色あざやかな防具、ペッコー式に身を包み背中には、オノのような短剣を背負い。右手には小さな盾がついていた。おそらく片手剣だろう。男はそのハンターに後ろから声をかけた。

「おい、そのペッコのハンターさん。そのちっこいアンタだよ」とするとそのハンターは振り返り彼と目があつた。

男は驚いた。

「お前、まだガキじゃなーか…」

そのハンターはまだ少年のような顔立ちで、17か18辺りにみえた。するとペッコ装備の少年はこう言った。

「僕はガキじゃないです。ちゃんとした名前があるんですけど。それよりおじさん何ですか?」「クソガキアア! 誰がおじさんジャア!、俺は二十五歳だ。おにいさんだろがあ」

その瞬間、一気に静まる周りの話し声、集中する視線「あの…もう行ってもいいですか？」とペッコの少年が男に言った。

我にかえった男は目的を思いだし少年に持ちかける。「あのさ、そのクエスト俺も連れて行ってくれない？さっき大声出したの謝るか
らさ。」

すると少年は

「え？何で初対面の人と狩りに行かなきゃいけないんですか？」
男は言った。

「そのクエスト俺も受けようと思ってたんだけど、丁度アンタに先
こされたんだよ。なあ、これも何かのえんだろ、頼むよ。」

えー、と少し考え込む少年にさらにたたみかける。

「もちろん俺は途中で裏切らないし。あ！そうだ。報酬で回復薬あ
げるからさあー、お願いしますよ。」

すると少年はこう言った。「分かったよ。じゃあこの狩りだけね。」

それともうひとつ。僕の名前はガキじゃない。僕はグランて名
前なの。」

すると男は

「ありがと。あと俺からも一つ。俺はおじさんじゃない。俺はビィ
ルてゆうんだ。よろしくな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7651z/>

MHP 3 r d fightingハンター

2011年12月25日00時57分発行